

特別寄稿

退任にあたって ―異文化研究を追って―

塚本美恵子[†]

1. はじめに

2021年3月末日をもって駿河台大学を退職致しました。これまで30年以上の長きにわたり沢山の皆様にご支援をいただき本当に有難うございました。改めて御礼申し上げます。

振り返れば、駿河台大学の教壇に初めて立ったのは1989年、法学部の英語担当非常勤講師としてでした。1994年には日本ではじめての学部である文化情報学部の専任教員として就任し、2009年からは学部改組で名称変更されたメディア情報学部の教員として研究・教育に携わってきました。

またこの度は寄稿の機会をいただきましたので、私がこれまでライフワークとして取り組んできました異文化教育と研究、その中でも特にこれまでの授業で行ってきた実践と、科研費等をいただいで繰り返し実施してきた日本・アメリカ・ブラジル・ペルーの学校での調査について述べさせていただきます。

2. 異文化体験：「常識」の崩壊

私の教育・研究テーマは、異文化研究です。とりわけ子どもの文化習得に関する研究に関心を持ち、授業では異文化理解を促す教育実践を行ってきました。「文化」は目に見ることがなかなか難しいことから、これまででは文化を可視化できるように、映像を活用したさまざまな研究や実践を行ってきました。私がこうした異文化研究に関心を持つようになったのは、家族でアメリカに滞在

したことがきっかけでした。

日本の経済成長が目覚ましかった1980年代、多くの日本企業が海外進出し駐在員を派遣していました。そんな時期に我が家のニューヨーク駐在が決まりました。学生時代にアメリカの家庭にホームステイした経験があった私は、海外駐在を打診された時には特段の問題意識を持つこともなく快諾しました。

ニューヨークの隣のニュージャージー州での生活が始まって程ない頃、近くの幼稚園に息子を入園させようと見学に行きました。日本で外国人を見ることもほとんどないまま渡米した息子は、園ではずっと私の後に隠れるようにしていましたが、そんな様子を見た担当者は息子が安心できるようにしばらくは母親の私と一緒に通園するように勧めてくれました。おかげで私はアメリカの幼稚園を観察する機会を得ることができました。

通園初日、言葉がわからない息子に向かって担当の先生は小さな絵本を見せながら「これは黄色ね。バナナの色よ。そう、太陽の色ね」と優しく話しかけてくれたのですが、驚いたのは私でした。え?! 太陽は黄色じゃないですよ? 日本の国旗は日章旗と呼ばれ、日の丸の赤は日の出の太陽を象徴すると聞いて育ってきた私はびっくり仰天!! 誰もが知っている事だと思った私は、即座に先生に「あの、太陽の色は黄色じゃなくて赤ですよ?」と伝えたのですが、一瞬げんな顔をした彼女は「黄色は太陽の色ね」と何事もなかったように繰り返したのです。

これが私にとって衝撃の異文化体験でした。日

[†] 駿河台大学名誉教授

本語と英語で表現が色々違うことは私も承知していましたが、誰が見ても同じに見える筈の自然界の太陽の色が違うなんて…。私の中の「疑う余地のない常識」が、ガラガラと音をたてて崩れていくような衝撃を受けました。

それ以来、今まで意識したこともなかった文化について考えるようになりました。アメリカに住み、子どもをアメリカの学校に通わせるようになると、それまでは見えていなかったアメリカ文化の深層が見えるようになってきたのでしょうか。次世代を育てる教育の場では、とりわけ文化の継承が行われる機会が多いことから違いが目につくようになったのかもしれませんが。

3. 文化の選択 学びの原点

アメリカでの生活が少し落ち着き始め数多くの日本人駐在員のご家族と交流するようになると、子どもたちの文化や言語習得の話題をよく耳にするようになりました。滞在が3年を過ぎると親が日本語で話しかけても子どもたちは英語で応えるようになるといった話です。我が家の子どもたちの言語が英語になると、日本に居る祖父母とコミュニケーションがとれなくなる訳ですから、私の頭は混乱し始めました。我が家の子どもたちをどう育てれば良いのか？ 言語はどうするのか?? わからないことばかりです。そこで考えたのが、学校で学ぶことでした。車に乗る前には自動車学校に通って基本的なことを学ぶように、良い親になる方法を学ぶには学校に行くのが一番近道だろう…と考えた訳です。何とも呆れる程、単純な思考ですが、私は早速行動に移しました。我が家から一番近いコロンビア大学大学院のFamily and Community Educationに入学したのです。

後でわかったことですが、コロンビア大学は文化人類学者ルース・ベネディクトやマーガレット・ミードらを輩出した大学で、彼女らの薫陶を受けた教授陣も教鞭をとっておられるところでした。授業は伝統的で厳格なスタイルをとられる教授陣

も多かったのですが、私の指導教員を引き受けて下さったマクダモト教授は、日本にも研究調査にいらしたことがあるとても気さくな方でした。マクダモト教授は文化人類学と言語学の専門家でありながらも、社会学や心理学等のふんだんな知識を援用しながら事象を分析していく授業はとても楽しく、彼の授業は常に教室に学生があふれかえっていました。とりわけ夏学期に開催されるworkshop形式の授業は、全米から集まった研究者らが侃侃諤諤の議論を繰り広げ、そのやりとりを聞いているだけでもワクワクしました。学生時代は授業も真面目に受けず航空部でグライダーに乗って明け暮れた私ですが、人生で初めて学ぶことを楽しいと感じました。

大学院で学ぶようになり自身のテーマについて調べ始めると、帰国子女や海外子女教育といった子どもの文化習得に関わる研究が日本でも行われるようになっていくことを知りました。ただ当時は、帰国子女の適応パターンなどを類型化する研究が多く、海外で子育てをしている当事者がどう対応すれば良いのかという手ごかりは全くつかまませんでした。そんな中、コロンビア大学の図書館(C.V. Starr East Asian Library)で出会ったのが星野命編著『異文化とのかかわり(異文化間の心理)』でした。感銘を受け、著者の星野先生にお手紙を書いたところ、出版されたばかりの箕浦康子著『子どもの異文化体験—人格形成過程の心理的人類学的研究』が届きました。まさに私が求めていた本で何度も何度も読み返しました。と同時に、見ず知らずの海外に住む主婦からの手紙を受け取って関連著書をアメリカまで送って下さった星野先生の思いやりに胸が熱くなりました。

帰国後は帰国子女を持つ親の会の協力を得て調査を実施し、調査に協力いただいた方々に結果をご報告すべく、帝塚山学院大学国際理解研究所に論文を投稿しました。この論文「海外滞在家庭における国際理解教育—家庭における国際理解教育とは何をどの様に教えるべきか—」は幸運にも国際理解教育奨励賞、最優秀賞 帝塚山学院賞をい

ただき、受賞は新聞で報じられ、本としても出版されました。

アカデミックな世界からほど遠い世界に居た主婦が、子どもの教育に悩み迷い、日米で素晴らしい師に出会って学び始めたのが、私の学びの原点でした。

4. アメリカの学校

ご存知のようにアメリカはUnited States of Americaというようにそれぞれの州が集まって国を形成していますので、州ごとの独自性を保っています。先般、皇室の眞子様と結婚された小室圭さんの名前が、ニューヨーク州司法試験合格者リストになかったことが報じられていましたが、アメリカでは医師も弁護士もそれぞれの州が実施する試験に合格しなければ働けません。州立大学も州の税金を納めていない州外の人への授業料は州の住民より割高になります。公立小学校も同じで、越境入学するには高額な授業料が求められます。隣人の説明では、税収入の多い裕福な町の教員や警察官の給与は高くなり、その町の教育レベルや治安が良くなり、その結果、町の人々の資産価値が増すのだそうです。

アメリカの小学校では、教科書から筆記用具まで学校が貸与してくれますので、我が家の子どもも学校にはLunch Boxだけ持って通学していました。校長先生とお話した際に、日本では小学校では給食が提供されていることをお伝えすると、「本校では給食を提供していないことを誇りに思っています」とのお返事を聞いて返答に戸惑ったことを覚えています。

アメリカの学校の教室に入ってまず気づくのは、日本の学校のように一斉授業を見るのが少ない点です。ニュージャージー州の我が家の息子が通った幼稚園（私立）でも子どもたちはそれぞれのコーナーで別々の遊びをしていましたし、小学校（公立）でも同じ算数の授業をしているようでも、子どもたちはそれぞれ違った問題に取り

組んでいました。

小学校では教員が担当する学年はほぼ固定しているようで、クラスは先生方の名前で呼ばれていました。教員は担当学年の教材だけではなく、上下の学年レベルの教材も豊富に準備している学年教育のプロという感じでした。子どもたちも‘出来る子’、‘出来ない子’ではなくslow learnerやtalentedと呼ばれ、個々の子どもたちの個性を尊重する方針が貫かれています。英語が全くできない子どもたちにはESL教室が準備され、常に子どもたちの学びのペースに合わせた環境が整えられていると感じました。

とりわけ私の興味関心をひいたのはShow and Tellの時間でした。子どもたちにお気に入りの物を学校に持参させて、それをクラスメートの前で発表するShow and Tellの時間は、小学1年生から設けられていました。日本人は「自らの考えを伝える力」が弱いとよく指摘されますが、アメリカでは小学校1年から自分のことを話すトレーニングをしているんですね。

公立小学校には肌の色、目の色、宗教等さまざまな文化背景の子どもたちが通っていますが、ある時、「クリスマスソングを歌う」ことへの参加の可否を問うお知らせを子どもが学校から持ち帰ってきました。それまで私もアメリカはBoston Tea Partyをきっかけに独立した国ですので、皆がクリスマスを祝うと何となく思っていたのですが、我が家の住んだコミュニティではJewishの方も多く、クリスマス時期にはハヌキヤと呼ばれる燭台に毎晩光をともしていくハヌカを祝うと知りました。こんな事情もあり、教育の場ではさまざまな配慮がきめ細かくなされ、クリスマスソングを歌うにも保護者の許諾を得ていることがわかりました。

アメリカでの子育てを経験して痛感したのは、物事を多面的に捉える視点の重要性でした。多様な考え方への柔軟な対応力、そして自らの考えを伝えるコミュニケーション力こそが、異文化を理解し互いに共存するためにも不可欠だということでした。

5. 授業実践事例

大学で授業を担当する際に常に心がけたことは、学生が楽しんで学べるようにすることでした。これまで①「映画の吹替え授業」、②「英語の映像制作授業」、③「異文化体験授業」、ゼミでの④「ケーブルテレビの番組制作」、⑤「メディア・リテラシー」や「メディア情報とキャリア」などの授業で学生発表を行ってきましたが、そのいずれも学生自身が楽しめる授業を目指していました。ここでは①～④の内容を手短にご紹介します。

5.1 映画の吹替え授業

「英語は苦手」と話す学生の声を聞いて始めたのが『映画の吹替え授業』で「英語を楽しく学ぼう」と企画したプロジェクトです。学生は5～6人でグループを結成し、自分達のお気に入りの映画のワンシーンを選んで、その英語の台詞を吹き替えます。当時は通年の授業でしたので秋学期からプロジェクトを開始し、大学祭時に吹き替えた映像の完成作品を公開して投票してもらい、1位に選ばれば「A」を獲得するという企画です。吹替え作品は、①英語の映画であればどんな作品でも良い、②吹替え時間は5分、③グループ全員が話すこと、を原則としました。学生たちは、選んだ映画のシーンの英語の台詞を聞き取り、映像スタジオでオリジナルの映画を背景に吹き替えるのですが、学生が欠席すると該当の台詞が抜けますし、練習していないと次の台詞担当の学生が話せなくなるなど不都合が生じるため、学生の遅刻・欠席が大幅に減少し出席率が上がりました。しかも映像スタジオでは他のグループの収録状況を見るので、頑張っているグループの出来栄を見て他のグループも時間外に繰り返し練習をするようになりました。このプロジェクトでは、参加学生は自分たちの努力の成果を録画映像で確認できますので、満足度の高い授業となりました。また大学祭で吹替え作品を上映すると、投票用紙には近隣の高校生からの「〇〇さん素敵でした」といったメッ

セージが添えられていたり、保護者の方に「息子がこんなに英語頑張ってるんですね」と喜んでいただいたりと思わぬ効果も確認できました。映画の吹替え授業が好評だったことから、その成果を学会で発表するとテレビや新聞などのメディアで取り上げられ、その後学内の複数の英語の先生方も同様の企画を実践されるなど好評でした。

5.2 英語の映像制作授業

映画の吹替え授業が好評だったことから始めたのが英語の映像制作授業です。学生はグループで映像作品を作り、これに英語のナレーションをつける、という授業です。学生達はそれぞれに凝った映像作品を企画制作し、それぞれの労作に英語のナレーションをつけて素晴らしい作品を仕上げてくれました。こちらも大学祭で上映し、投票結果を成績に反映させましたが、学生からも好評でした。

5.3 異文化体験授業

5.3.1 新婚家庭ゲーム

独自に考案した異文化体験ゲームで、参加者には文化融合をどのように実践するかを疑似体験してもらう授業です。異文化体験というと外国や外国文化を思い浮かべる方が多いですが、日本国内にもさまざまな文化があること、そして結婚はそれぞれが背景を持った文化を融合させていくことが不可欠となることから、文化融合を疑似体験してもらうゲームに仕立てました。参加者は男女でペアになり課題に取り組みます。課題は「結婚して最初のお正月のお雑煮に何をいれますか?」というものです。北海道から九州まで日本のお雑煮には色々特色があり、お餅一つとっても丸餅、角餅、餡入りなど色々ありますし、中に入れる具は勿論のこと、汁はみそ仕立てか醤油ベースかなど、学生には自分の実家のお雑煮を紹介してもらった上でペアになった学生同士でお雑煮をどうするかを話し合ってもらいます。たかがお雑煮ですが、各家庭のシンボリックな存在でもあるお雑煮にこだわる学生もいます。最後には全員に自身の感想を

話してもらうブリーフィングをしますが、多くの参加学生からは「楽しかった」「異文化体験ってこういう事なんですね、実感しました」等と好評を得ました。

5.3.2 バーンガ

少し広めの教室があれば実施できる異文化体験シミュレーションゲーム「バーンガ」です。トランプを使うゲームで、参加者には、「今日は新しいトランプゲームに参加していただきます。ここでは会話は厳禁なのでおしゃべりしないようにご協力願います」と伝え、参加者を5～6名程のグループに分けます。各テーブルには1から順に番号をつけておきます。各テーブルには紙に書いたルールカードを配っておき、後にこのルールカードは回収します。実は各テーブルに配ってあるルールはそれぞれ異なっており、しかも最終的には何が一番強いとは明記していないため、参加者が遊びの中で最強のカードを決めていくことになります。勿論、参加者は各テーブルのルールが違うとは知らされていません。一定時間遊んで慣れた頃にルールカードを回収し、ゲームを開始します。ゲームの勝者は番号の少ないテーブルに「昇進」し、敗者は番号の多いテーブルに「落ち」ます。これを何度か繰り返します。各グループでは2名の新メンバーを迎えても残りの参加者が前と同じルールでプレイを続けます。時には移動してきた新メンバーが強引に旧グループのルールを持ち込む場合もあり、参加者間でのちょっとしたいざこざが生じることはありますが、そこは「話をしない」原則は守らせてゲームを続けます。移動せず同じテーブルでプレイしている参加者にとっては簡単なゲームですが、テーブルを移動した人は自分が理解しているルールと違い戸惑います。これが異文化体験そのものですが、その対応は参加者によってさまざまで、ルールが違うことに気づいて新しいテーブルのルールを理解して勝ちすすむ参加者がいれば、新しいテーブルに移動したとたん何かがどうなっているのか理解できないままズルズル

と落ちていく参加者もいます。

ゲーム終了時にはこれは異文化体験ゲームであることを説明し、参加者全員にどんな気持ちになったかをブリーフィングで話してもらいます。トランプゲームとはいえ、参加者の異文化体験のインパクトは大きかったというコメントが多く寄せられました。

5.4 CATV番組制作とメディア・リテラシー

2003年度から始めたゼミナールでは、番組制作を通して「多様な視点」を学ぶ実践を行いました。地元飯能の方々に取材させていただいてケーブルテレビの番組『見〜つけた』を制作したのですが、ゼミでは、常に取材協力者や視聴者の視点などさまざまな方の視点を意識しながら番組づくりをするように伝えました。飯能ケーブルテレビからは視聴者からの声をフィードバックしていただきました。ゼミ生にとっても視聴者からの声は、多様な視点があることを自ら学ぶことができる素晴らしい機会となりましたし、何よりも地元の方からの応援がゼミ生にとってとても励ましになったようです。

6. 雪だるま 助成を得た調査研究

大学教員として教育と研究は車の両輪だとよく言われますが、これまで研究については下記ののような助成をいただきました。

- ① 2003年～2004年度 駿河台大学共同研究助成費「駿河台大学の学生の英語力向上のための教材開発プロジェクト」（研究代表者）
- ② 2004年～2006年度 科学研究費補助金〔基盤研究〕(C)「高等教育における実践的メディア・リテラシー教育の試み―地域との連携を目指して―」（研究代表者）
- ③ 2007年～2008年度 駿河台大学特別研究助成費「デジタル映像・音響情報の活用と発信―情報配信と学生のスキル向上のための実践教育―」（研究代表者）

- ④ 2010年～2012年度 科学研究費補助金[基盤研究](C)「映像メディアによる教育課題向上に関する研究」(研究代表者)
- ⑤ 2013年～2015年度 科学研究費補助金[基盤研究](C)「映像メディアの教育課題向上に関する研究」(研究代表者)
- ⑥ 2004年～2006年度 科学研究費補助金[基盤研究](B)「異文化間教育に関する横断的研究—共通のパラダイムを求めて—」(研究分担者)

この中の④と⑤では、日本・アメリカ・ブラジル・ペルーの学校で異文化教育の視聴調査を実施しました。科研での研究については報告書を記していますが、ここでは研究結果の概略を手短に紹介させていただきます。

洋画をスタジオで吹替える「映画の吹替え授業」や「英語の映像制作授業」といった映像を使用した言語教育、ケーブルテレビの番組制作授業など、映像メディアを授業に活用する授業実践を続けていると、次第に映像の有効性と教育効果を実感するようになりました。そこで、「文化」も文化間で比較研究することで、地域や文化特有なもの、地域や文化を超えて広がるものがあるのではないかと考えるようになりました。そんな時に出会ったのが、世界の代表的なアニメ作品をシリーズで紹介した、ANIMATED TALES OF THE WORLD (SCHLESSINGER MEDIA) の中の『雪わたり』でした。宮沢賢治原作のこの作品は、すでに日本を代表するアニメ作品としてアメリカで英語版、日本語版、スペイン語版が販売されていましたので、早速、日本で制作した担当者と一緒に作品の英語版を日本の小学生児童を対象に視聴してもらう調査を行いました。調査の方法はアメリカのテレビ番組「セサミストリート」が番組制作で使用していたフォーマティブ・リサーチと呼ばれる①視聴者心理調査(子どもたちの様子をビデオカメラで撮影し、1分ごとに一人ひとりの子どもたちの様子を分析する手法)と、②質問紙調査(描画を含む)です。

日本での初めての予備調査では、「英語なんてわかんないから嫌だ～」と寝そべりながら騒いでいた小学校低学年の男の子達が、上映を始めるとアニメを見始め、暫くすると数人が英語のナレーションをそのまま反復(Mimic)し始めました。この現象を見て驚いて、本人や保護者に確認したところ、全員が本格的な英語学習経験のない子どもたちであることが判明しました。調査結果からは、子どもは言語が理解できなくてもかなりの集中度で映像を見て彼らなりに理解していることがわかりました。この予備調査結果から、この作品の日本語版をアメリカの子どもたちに見せたら日本語を話すのだろうか…そんな疑問が生じ、これを確認するために、アメリカでの調査を開始した訳です。

映像利用と理解についての先行研究では、スペイン語と英語のバイリンガルクラスの幼稚園児を対象にテレビ番組を見せるグループと見せないグループで実践を行ったところ、テレビを見せたグループの方が音韻認識と文字認識スキルが向上したとの報告や、アメリカに到着して3ヶ月しか経過していないスペイン語話者の子どもたちも、英語のテレビ番組に集中していたこと、更に集中力の欠ける learning disability の子どもたちがテレビを集中して視聴していたとの報告がありました。また日本での映像の有効性に関する調査の中には、高校生向けの理科の番組を使用して小学4年生に動画で示すと、小学4年生でも中学生や高校生と同程度の再生能力を示す報告などがありました。

そこで最初はアメリカのサンフランシスコの Japan Town 近くにある日本語教育を実施している公立小学校に調査をお願いしました。ここでは低学年も対象としたので、子どもたちには『雪わたり』で一番印象に残ったシーンの絵を描いてもらうことにしました。この描画の調査結果からは、映像に出てきた雪だるまは2玉であるにもかかわらず(図1)、雪だるまを3玉に描く子が一定数いることに気づきました。この後は質問紙調査では映像で見た雪だるまを描いてもらう項目を追加しました。同時に、改めて日本の小学校で調査を

実施したところ雪だるまを3玉に描いた子は1人もいませんでした。再度、アメリカに向かい、3つの小学校(A校：日英バイリンガル校、B校：スペイン語と英語のイメージ校、C校：普通の私立小学校)で調査を行いました。調査の方法は、これまで同様、①視聴者心理調査(フォーマティブ・リサーチ)と②質問紙調査です。その結果、(1)日米の子どもたちは言葉がわからなくても60%以上の注視度で映像を視聴し、(2)注視度の低いシーンは、日米で同じようなパターンを示し、(3)お気に入りのシーンは学校毎に異なっていた、(4)アメリカの子どもたちは物語の鍵となる雪だるまを2玉ではなく3玉で描く者がかなりいる(図2)ことが明らかになりました。

翌年、再び渡米し全員に視聴後に雪だるまを描いてもらったところ、(5)小学校4年生101名では38%が3玉で描いた、(6)3玉の雪だるまを描いた児童はA校で25%、B校で39%、C校で47%と学校により差がありました。子どもたちの描いた雪だるまの中にはマフラーをつけていたり、お祭りのシーンでは盆踊りの丸く輪になって踊っているシーンの中心にキャンプファイヤーの火が描かれていたり…と実にさまざまでした。子どもたちの絵を分析すると、改めてそれぞれの文化の影響を受けていることが明らかになりました。おそらく、子どもたちは映像メディアを見たまま記憶するのではなく、雪だるまをそれぞれの背景文化の影響を受けたイメージの中で再構築して描いていると考えられました。

その後、日本の日系ブラジル人学校、ペルー人学校、ブラジルの日系人学校、ペルーの日系人学校とインターナショナルスクールでの調査を実施したところ、雪だるまを3玉で描く子どもの割合は英語圏の影響の強いところ程、増える傾向があることがわかりました。

2015年以降は、日本のスーパーマーケットや店舗でも3玉の雪だるまの飾りをよく見かけるようになりましたので調査を終了しました。



図1 「雪わたり」の雪だるまシーン

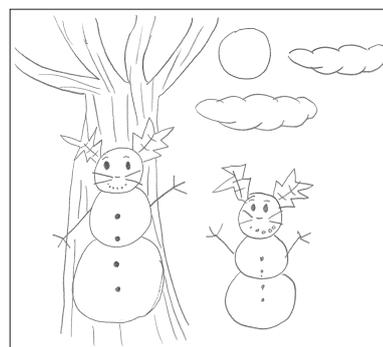


図2 アメリカの子どもが描いた雪だるま

7. おわりに

私の異文化研究はまだ道途中で、中途半端な形で終わってしまいましたが、これまでの調査研究結果から、人は見たままを記憶するのではなく、見たイメージを自身の持つ背景文化の影響を受けた形に変形させて記憶イメージを再構築していることがわかってきました。

大学の授業では、異文化対応力、つまり物事を多面的に捉える視点と対応力、そして自らの考えを伝えるコミュニケーション力を養うことを目標の一つとして進めてきました。私の力は微々たるものでしたが、何より恵まれたと感じるのは、学生達自身が積極的に授業に参加してくれたことでした。また今回改めて、研究への足掛かりを築いてくれたコロンビア大学大学院のマクダモト教授やICUの星野命先生はじめ沢山の皆様のご支援を得てきましたことを再確認しました。皆さま、本当に有難うございました。